

心理臨床家が行う保育カンファレンスの特徴

：構成メンバーの違いに着目して

村上 葉月 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科
青木 紀久代 お茶の水女子大学

要約

多様化したニーズに応える保育現場において、保育者と心理臨床家の協働が注目されるようになってきている。その効果的な実践の1つに保育カンファレンスが挙げられる。本論では保育カンファレンスに協働する心理臨床家にフォーカスをあて、様々に公表されている保育カンファレンスの様相について、構成メンバーの違いによる特徴を比較、整理した。抽出した19件の文献を概観した結果、構成メンバーに関わらず「保育者の省察が深まる」「保育実践の再構想が進む」「子ども理解が深まる」「連携が進む（園内・家庭など）」といった保育者の主体性にまつわる効果が見られた。さらに、心理臨床家の入る保育カンファレンスには、それらと関連して「保育者のエンパワメントにつながる」効果も加わることがわかった。その背景にはアセスメントや関係性の専門性といった専門性を持つ心理の専門家の子どもの視点と、保育者の視点の突き合わせなどがあると考えられた。これらが心理の入る保育カンファレンスの中心的な特徴だといえるだろう。

キー・ワード：保育カンファレンス、心理臨床家、構成メンバー

1 問題と目的

子育て支援、被虐待児・発達障害児や「気になる子」への実践等、保育の現場において求められる支援が多様化している。それらの状況を背景に、保育者の心理の視点へのニーズが高まり、心理の専門家が保育現場に赴いて保育者と協働する方法が広がっている（浜谷，2005・2013）。例えば、心理職が保育者に巡回相談を実施し、そのフィードバックを行うコンサルテーションが挙げられる（守，2013；鶴，2012）。中でも、心理臨床家と保育者の1対1のコンサルテーションよりも、心理臨床家も加わった多数の構成員で事例検討を実施する保育カンフ

ァレンスが開催できると、1回の巡回相談の効果が高められるという利点がある。

その効果はこれまで様々に検討されており、子ども理解の深まりや、子どもへの対応方法の理解が進むこと、保育者の支援になることなどが指摘されている（真鍋，2011；大村，2010）。しかし効果があるとされる一方、弊害も指摘されている。心理学の専門的な知見や技法を保育実践に導入することで、保育者の主体性を損なうというものである（浜谷，2012）。それ故、心理臨床家は、保育者が保育カンファレンスを学びの機会と意味づけ、主体的に実践に生かしていくことを目標としながら（青木，2017），

保育カンファレンスが有効に機能するよう配慮していく必要がある。

保育カンファレンスと言えば、参加者が事例を持ち寄り、集団で検討する方法として、保育の分野で多くの実践と研究が展開されてきた。その効果は、保育者の省察を促し、専門的成長を促すものとされている(若林・杉村, 2005)。特に、近年の保育の質向上への関心の高まりによって、質の向上に寄与しうる保育カンファレンスに注目が集まっており、効果的な保育カンファレンスにしていくための要因について、様々に検討されている(汐見, 2015)。

ところで、心理臨床家の入る保育カンファレンスは、保育者のみの保育カンファレンスや、他の専門家と協働する保育カンファレンスの効果やその促進要因においてどのような違いがあるのだろうか。本論では、多職種の1つとして保育カンファレンスに協働する心理臨床家にフォーカスをあて、実践の報告と様々に公表されている、保育カンファレンスの様相について整理していきたい。

II 方法

1. 文献の調査方法

文献データベースとして CiNii を用いた。保育カンファレンスは、森上(1988)によって保育の分野に紹介されたという。そこで、1988年以降のものに限定し、言語は日本語とした。

「カンファレンス, 保育」, 「巡回相談, 保育」, 「コンサルテーション, 保育」 「心理臨床家, 保育」のキーワードで検索した。その結果, 「カンファレンス, 保育」173件, 「巡回相談, 保育」は100件, 「心理臨床家, 保育」は5件該

表1 本研究で取り上げた文献

文献番号	著者	年	カンファレンス参加者
1	青木	2004/2007	職員(副園長・養護教諭担任保育者・フリー保育者)・心理臨床家・大学院生
2	浜谷	2005	職員(園長・保育者数人・看護師など)・発達臨床の専門家・自治体の保育行政担当者
3	芦澤ら	2008	職員(園長・担任・他クラス担任など)・発達臨床の専門家
4	田中ら	2010	職員(副園長・担任保育者・補助担任)・異なる専門性(発達心理学・臨床心理学・幼児教育・特別支援教育)を持つ短大教員
5	森	2010	担任と他クラス教師・特別支援教育コーディネーター・校長・教頭・臨床発達心理士
6	芹澤	2010	園長・各クラスの担任一名ずつ・グループ園の研修を統括している元園長・および発達臨床の専門家の9名
7	浜谷	2013	可能な限りの職員の出席・発達心理学の専門家・自治体の保育行政担当者
8	向井	2018	担任・主任・園長・相談員(心理)
9	藤崎	2005	保育者53名・保健師3名・相談員9名・行政担当者3名
10	今野ら	2014	臨床心理士・保育者
11	Rustin et al.	2008/2015	心理・保育者・その他専門家
12	馬場ら	2001	心理臨床家・保育者
13	松井	2009	保育者6名(主任・担任)・研究者1名
14	中坪ら	2010	保育者・研究者・大学院生
15	田中ら	1996	保育者(学級担任6名・副園長・非常勤職員の計8名)および保育の研究者
16	木全	2008	保育者・保育の研究者
17	成田ら	2017	障害のある子どものいる3クラスの担任保育士・主任保育士の他自主的に参加した保育士計15名程度。外部のオブザーバー(特別支援教育・発達障害臨床の専門家)
18	松本ら	2012	保育者・研究者・大学院生・その他
19	平松	2011	保育者・園長

当した。そのうち、議事録やポスター、重複している文献は除外した。また、カンファレンスに該当しない文献(コンサルタントとコンサルティが1対1で行う事例検討など)や、カンファレンスの参加者が不明な文献、参加者の誰も発表事例に関与していない文献などを除外し、

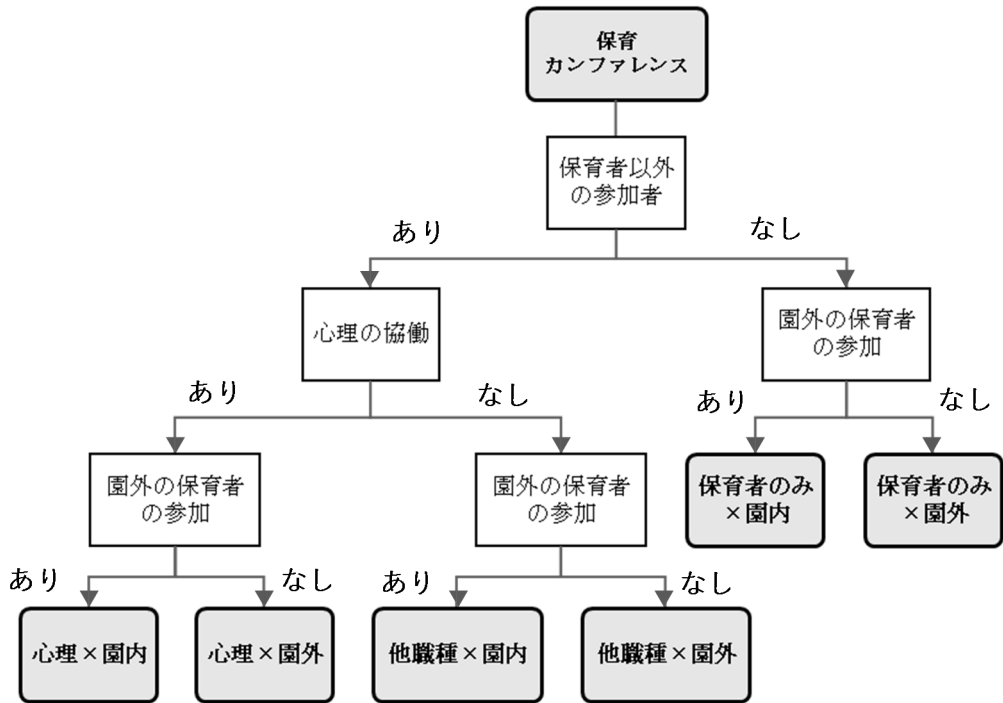


図1 保育カンファレンスの分類

16件の文献を用いた。さらに、特徴的な実践を行い、カンファレンスの特徴が掴める海外の実践や、心理臨床家の実践の特徴がよく描き出されている文献3件を追加し、計19件の文献を用いた(表1)。

2. カンファレンスの分類手続き

本論では、心理臨床家の入る保育カンファレンスの特徴と、他の保育カンファレンスを比較するために、その構成メンバーに注目して保育カンファレンスの分類を行った。その際、組織の外部コンサルタントが実施するコンサルテ

ーションと、組織内のメンバーがコンサルタントを務める場合のコラボレーションの概念の比較(Caplan, 1970; Caplan et al., 1994)の観点も参考にした。Caplanらは、コンサルタントが組織の内か外かによって、コンサルタントとコンサルティの関係、対人関係の作用のアレンジ、関係性におけるコミュニケーションの秘密性、コンサルティの自由度などに影響を受ける点を重視したのである。メンバーが組織の内部者のみか外部者を含むかというこの観点は、複数名で検討するカンファレンスにおいても重要な視点であると考えた。

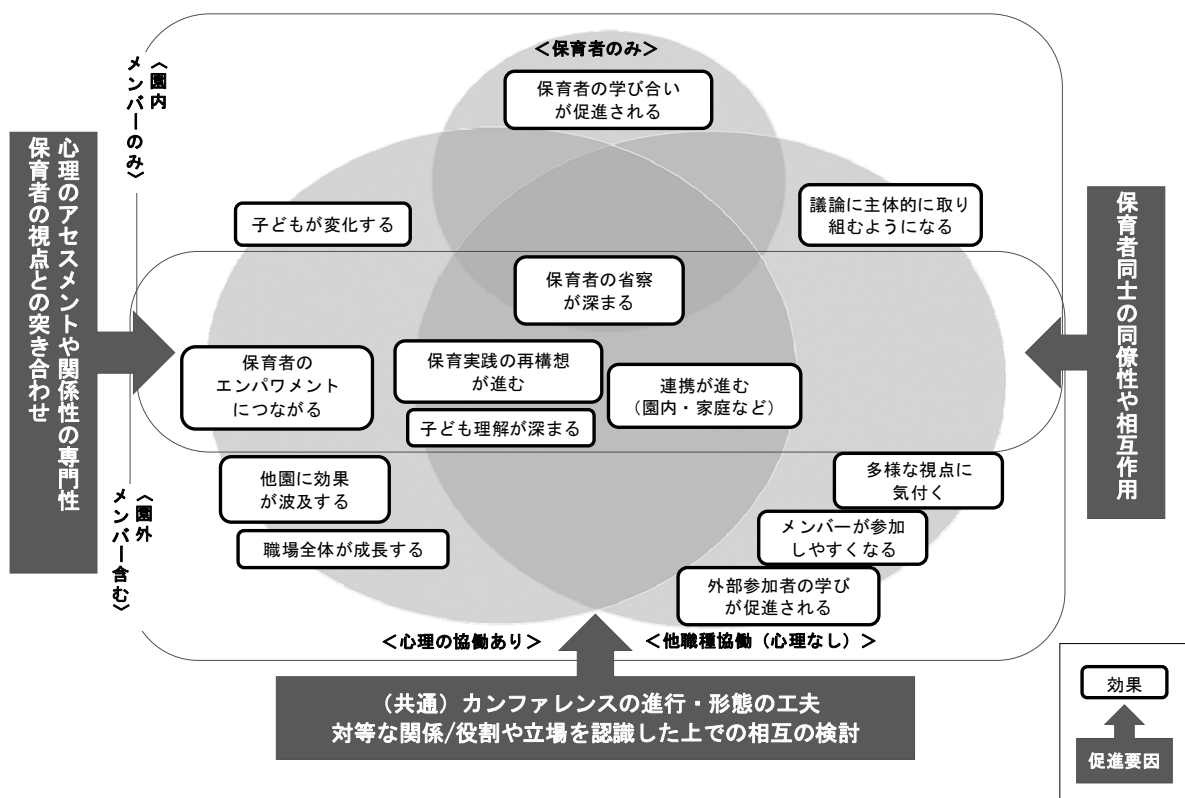


図2 保育カンファレンスの効果と促進要因の概要

そこで、まず、分類の第一段階として、井上(2013)の、施設の職員のみによる「Closed」なカンファレンスか、他の第三者が加わる「Open」なカンファレンスかという分類の軸も参考にし、保育カンファレンスに保育者以外の参加者がいるかどうかで区別した。次に保育者以外の参加者がいる場合、協働する専門家に心理の専門家が含まれるのか否かによって区別した。

最後に、園内の保育者のみか、園外の保育者も参加しているかによって区別をした。また、第一段階において保育者のみの参加者に区分された場合も、園内の保育者のみか、園外の保育者も参加しているかによって区別した。これは、先のコンサルテーションとコラボレーシ

ョンの観点に加え、園内の普段の関係性や情報の共有度が、カンファレンスの関係性に大きく影響を及ぼす(鳥光ら, 1999)ことから、必要な観点だと考えた。

以上の手続きにより、【心理×園内】【心理×園外】【他職種×園内】【他職種×園外】【保育者のみ×園内】【保育者のみ×園外】の6つに分類された(図1)。なお、今回は【保育者のみ×園外】に該当する文献は見られなかった。

この手続きにより分類された文献内において、保育カンファレンスの効果とその促進要因について触れていた部分を抜き出した。それらの要素の共通性と差異に着目して要点を以下にまとめていく。

Ⅲ 結果

保育カンファレンスの効果と要因を概観する(図2)。なお、個別の分類に独自の要素が見られた場合に、個別の分類を取り上げた。

1. 保育カンファレンスの効果

1) 共通性

多くの分類に共通する効果として、「保育者の省察が深まる」「保育実践の再構想が進む」「子ども理解が深まる」「連携が進む(園内・家庭など)」が挙げられた。これらは、保育カンファレンスの中心的な効果であると考えられた。

なお、「子ども理解が深まる」に関して、心理の専門家が入る保育カンファレンスと、心理の入らないカンファレンスでは、ニュアンスの違いがみられた。心理の専門家が入る場合には、子ども視点への変換がその特徴として多く挙げられていた。例えば、文献番号(以下略)6では、保育者の対象児への見方が「こだわりが強く他児とトラブルを起こしやすい子」から、「関わり方がわからない子」という子ども視点での理解へと変化した例を挙げ、カンファレンスの中で問題が捉え直されていく様子を示している。1・7においても、子どもの行為の内側にある文脈を理解する、子どもの視点・関係性の中での子ども理解が進むなど、心理の視点を取り入れた子ども理解であることが報告されている。一方心理の入らない保育カンファレンスの場合には、例えば13・14で見られたように、子どものできることに着目したり、他児と比較するのではなくその子を中心において子ども理解を再構成していくことや、その積み重

ねをより重視する傾向にあるようだった。

2) 心理の専門家との協働においてのみ見られる共通性

「保育者のエンパワメントにつながる」が心理の専門家との協働においてのみ共通して挙げられた。詳しい内容を見ていくと、2・3の実践への意欲の高まり、6の保育者の心理的安定、8の不確かなことへの耐性・保育者の主体性の向上、11の子ども理解に基づいた実践に対する意欲の向上・子どものニーズに対するセンシティブティの高まり・情緒的安定などが挙げられていた。

この「保育者のエンパワメントにつながる」は、「保育者の省察が深まる」「保育実践の再構想が進む」「子ども理解が深まる」といった効果を挙げている同一の実践内に記述されていたことがその特徴でもあった。例えば、10では、心理の専門家が保育者と共にファシリテーターやスーパーバイザーを務めた園外カンファレンスを紹介し、保育者のエンパワメント(主体性向上)を効果として挙げていた。それは、保育者自身が気づき、考えるという、保育者の省察行為を通して見られたという。また、11の事例では、カンファレンスにおいて事例発表者がコンテインされ、子ども理解が進むことで、発表者は自らの仕事に意味を見出し、主体的に問題解決に取り組むだけでなく、子どもをコンテインできるようになるという効果が示されていた。

3) 【心理×園内】に独自の効果

【心理×園内】は、心理の専門家と協働する、園内メンバーによるカンファレンスである。巡回相談内で実施されることが多い。その独自の

効果としては「子どもが変化する」が挙げられていた。

4) 【心理×園外】に独自の効果

【心理×園外】は心理の専門家と協働する、様々な園の保育者によるカンファレンスである。複数園の保育者が集い、保育事例を検討するという研修方式の実践が報告されていた。

ここでは「他園に効果が波及する」「職場全体が成長する」ことが独自の効果として挙げられた。例えば、9では他園の保育者にふりかえりの重要性への気づきが促され、ふりかえり方のモデル伝達された事例や、11では組織全体として成長したことが報告されていた。

5) 【他職種×園内】に独自の効果

【他職種×園内】は、心理の専門家以外の他職種と協働する、園内のメンバーのみによるカンファレンスである。他職種の専門性については不明なものも見られたが、その多くは、幼児教育の研究者や、障害を専門とする巡回相談員などであった。

ここでは、「議論に主体的に取り組むようになる」ことが独自の効果として挙げられていた。例えば、14では参加者の視点の明確化・言語化が促進されることや、焦点化した議論が可能になることなど、保育者の、保育カンファレンスに臨む姿勢そのものが独自の効果として挙げられていた。

6) 【他職種×園外】に独自の効果

【他職種×園外】は、他職種と協働して行われる、園外メンバーを含むカンファレンスである。保育の外部公開などが該当する。

ここでは、「多様な視点に気付く」「メンバーが参加しやすくなる」「外部参加者の学びが促

進される」ことが独自の効果として挙げられていた。例えば、18では新鮮な意見・多様な視点に出会うこと、脱文脈、他園のやり方を知る効果などが報告されていた。

7) 【保育者のみ×園内】に独自の効果

園内の保育者のみのカンファレンスで、通常の園内研修が該当する。ここでは「保育者の学び合いが促進される」ことが独自の効果として挙げられていた。例えば、19では保育者相互に省察を深めていく様子が報告されていた。

2. 保育カンファレンスの促進要因

1) 共通性

多くの分類に共通する要因として、「カンファレンスの進行の工夫」「カンファレンスの形態の工夫」「関係性」が挙げられていた。ただし「関係性」について着目している点では共通しているものの、その内容としては、15・16・17のように対等な関係性を主張するもの、9・11・12のように場合によっては対等でない役割をもって実践しているが、その関係性の中で保育者の主体性が促進されているもの、13・19のように役割や立場を認識した上での相互の検討の重要性を訴えるものがあった。

さらに「関係性」に関して、心理の専門家の協働する保育カンファレンスとそうでないものを比較すると、前者は11のように子どもと保育者の関係性や、保育カンファレンスの対話やファシリテーターがコンテナー機能を果たすこと、8のように他職種協働を可能にする園内の関係性など幅広い関係性を含んでいた。一方後者は、園内の保育者同士の同僚性や相互作用について注目する傾向にあった。例えば15

では、それぞれが自分の考えを出しながらも、相手の立場に立って考える努力をし、その中で、自分自身を客観的に捉えられる力を養っていく様子を報告していた。16では、保育観の重なる部分だけでなく、はみ出した部分（それぞれの保育者のその人らしさ）が、さらに「重なりを大きくしている」という相互の関係性につながることを指摘していた。

2) 心理の専門家との協働という分類においてのみ見られる共通性

「相談員の専門性」が独自の要因として挙げられていた。つまり、心理の専門性である。具体的には、2は保育に即した発達と障害のアセスメント、3は相互作用の理解、保育者や保護者と協働する対人援助の専門性、7では多面的なアセスメントや、子どもの生きづらさと育てにくさに切り込む相談員の解釈と志向性（関係への志向、行動の意味づけを行う意味への志向）、11では集団や関係性に関する専門性などを挙げており、アセスメントと関係性についての専門性がその中心だといえよう。また、【心理×園外】においては、10・12のように臨床心理学の知識に基づいた具体的な関わり方の助言について言及される傾向もみられた。

3) 【心理×園内】において独自の要因

「多職種協働」「思考の観点の工夫」が独自の要因として挙げられていた。特に「多職種協働」では、先述の専門性を持つ心理の専門家（やその他の専門家）と、保育者の視点の突き合わせが効果を生む要因として挙げられていた。つまり、心理の専門性を押し付けるのではなく、ともに主体的に視点を突き合わせてこそ効果を生み出すとされていた。

具体的には、4の研究者と保育者の視点の突き合わせ・子どもの行動の解釈の突き合わせ、6の保育者の見方とは異なった視点の提供、8の保育者と巡回相談員との協同的「対話」（互いに見立てについて、対話を通して共有する）などが報告されていた。

4) 【他職種×園内】に独自の要因

「視点の変換」「カンファレンスという場の持つ安心感」が独自の要因として挙げられていた。具体的には15では物事を幅広く客観的に捉え、即断するのではなく、周囲の人に慣習的思考からの転換を促す人物「チェンジエージェント」の存在がカンファレンスの効果を促進することが報告され、その発言には、共に保育枠組みを振り返る」意思が内包されていることを報告していた。17では子どもの興味関心の共有や保育方針をさぐることで効果を生むことが挙げられていた。16では事例発表者の主観に寄り添い、その後は主観的に自分の問題として語っても大丈夫だと受け止めてもらえる場だと互いに感じたことなどが報告されている。なお、「視点の転換」に関しては、独自の要因として挙げたが、【心理×園内】の効果の方でも同様の指摘がされていた。

5) 【他職種×園外】に独自の要因

「役割の違い」が独自の要因として挙げられていた。18では、保育者の「(経験や)役割の違い」自体が、保育者自身が保育カンファレンスを有効に感じるかどうかに影響を及ぼしていることが報告されていた。

6) 【保育者のみ×園内】

「現場のニーズに応じたカンファレンス」が挙げられていた。19では、同じ園で保育にとも

に携わる関係だからこそ、身近な自分たちのニーズに沿った対話が有効に機能することが報告されていた。

IV 考察

これまで、心理の専門家の入る保育カンファレンスと、そうでないものを、構成メンバーによって分類し、その特徴を見てきた。ここで、心理の専門家が入るカンファレンスの特徴を、まとめていきたい。

保育カンファレンスには、その構成メンバーに関わらず、「保育者の省察が深まる」「保育実践の再構想が進む」「子ども理解が深まる」「連携が進む（園内・家庭など）」といった中心的な効果が挙げられていた。しかし、心理の専門家の入る保育カンファレンスにおいては、その中心的な効果に「保育者のエンパワメントにつながる」が加わる。これは、心理の専門家が入る保育カンファレンスの特徴だといえるだろう。

さらに、「保育者の省察が深まる」「保育実践の再構想が進む」「子ども理解が深まる」効果と、「保育者のエンパワメントにつながる」という効果は同一の実践の中でその効果が見られている点特徴的であった。子どもの視点や関係性といった心理の視点と保育者の視点の突き合わせをしながら「保育者の省察が深まる」「保育実践の再構想が進む」「子ども理解が深まる」ことが、保育者が主体的にその後の保育を実践していく「保育者のエンパワメント」に繋がっている可能性がうかがえた。

これらの効果の促進要因としては、「カンファレンスの進行の工夫」「カンファレンスの形

態の工夫」「関係性」が保育カンファレンスにおいて共通に、心理独自の要因としては「相談員の専門性」が挙げられていた。しかし、共通要因においても、その内容は心理の専門家の入る保育カンファレンスとそうでないものとは、差異が見られた。それは、これらの要因全てが並列な関係ではないことの現れではなかろうか。心理の専門家の協働する保育カンファレンスの場合、相談員のアセスメントや関係性についての専門性、それを生かした具体的関わりの提案がその促進要因のベースとなっていると考えられる。「カンファレンスの進行の工夫」「カンファレンスの形態の工夫」はむしろ、そういったベースとなる要因を反映したり、さらに拡張する具体的方法であると考えられた。

ところで、保育カンファレンス全般的に、保育者の視点に変化や深まりをもたらすこと、関係の重要性について触れている文献が散見された。保育カンファレンスでは、保育者がこれまでの方法ではうまくいかない困難を感じる事例について検討がなされる。そのため、これまでの思考や関係性から、いかに視点を変換するかがポイントになり、そのための様々な工夫がなされているのが実情のようである。

それらの方向性として、心理の専門家が協働する場合には子ども視点に基づいた心理のアセスメントや関係性の専門性が活用され、他のカンファレンスではメンバーの相互作用や同僚性をベースに、具体的な子ども議論につながる多様な方略を活用していると考えられた。

V まとめと今後の課題

以上より、アセスメントや関係性の専門性を

もつ心理の専門家との協働の保育カンファレンスを通して、保育者がエンパワメントされ、主体性が高まることで、心理の入る保育カンファレンスの中心的な特徴だといえるだろう。これは自らが臨床的に関わる対象の主体性を最大限尊重しようとする、臨床心理士の中核的要素（浅原ら、2016）とも一致する。

また、今回は心理の専門家が入るカンファレンスにおいて、コンサルテーションの目的である、「保育者の現在および将来の類似の課題へ対応力の向上」効果については1などでは触れられていたものの、全体的に記述が見られない傾向にあった。それについて石原（2018）は、スクールカウンセラー（以下SCとする）によるコンサルテーション研究から、対応力向上に至るまでには、「SCとの全体像共有」から「SC視点を使った自分取り戻し」に至り、「相談しつつ主体的に試行」し、さらに「教師判断で動ける主体的な状態」に変化するプロセスがあることを示している。今回、心理の入る保育カンファレンスにおいて見られた効果は、同様のプロセス中の効果を示している可能性がある。石原はSCの行うコンサルテーションについて検討していた。保育カンファレンスのプロセスについても、詳細な検討が期待されよう。

また、今までよしとされてきた「対等な関係性」という言葉で括れない、保育者の役割に応じた対話を重視する文献が散見された。今回、保育カンファレンスの構成メンバーによって、その効果や促進要因には差異も見られた。保育カンファレンスにおいて保育者と協働する心理臨床家も、保育カンファレンスを一括りにするのではなく、どのような場合にどのような関

係性が生きてくるのか、より詳細に検討していくことが望まれる。

<付記> 貴重なご意見をいただきました青木研究室のみなさまに心より感謝申し上げます。

文献

- 青木 紀久代（2004）. 幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究——心理的援助のためのアウトリーチ・プログラムの構築——, お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム 誕生から死までの人間発達科学. 中間報告書.
- 青木 紀久代（2007）. 幼児期から青年期までのメンタルヘルス縦断研究——心理的援助のためのアウトリーチ・プログラムの構築——, お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム 誕生から死までの人間発達科学. 第二次報告書.
- 青木 紀久代（2017）. 保育における“気になる子”の親とのコミュニケーションと支援 発達, 149 (38), 64-67.
- 浅原 知恵・橋本 貴裕・高梨 利恵子・渡邊 美加（2016）. 心理臨床家の専門性とは何か——熟練臨床家による語りの質的分析—— 心理臨床学研究, 34 (4), 377-389.
- 芦澤 清音・浜谷 直人・田中 浩司（2008）. 幼稚園への巡回相談による支援の機能と構造—— X 市における発達臨床コンサルテーションの分析—— 発達心理学研究, 19 (3), 252-263.
- 芦澤 清音（2010）. 発達臨床の専門性は保育カンファレンスで保育者をどのように支援するか——保育園の“気になる子”の事例検討会の分析—— 帝京大学文学部教育学科紀要, 35, 25-35.
- 馬場 禮子・青木 紀久代・矢野 由佳子（2001）. 保育における心理臨床研修のあり方——保育場面

- に生じる問題と対処の行方—— 研究助成論文集, 37, 224-230.
- Caplan, G. (1970). *The theory and practice of mental health consultation*. New York: Basic Books.
- Caplan, G., Caplan, R. B., & Erchul, W. P. (1994). Caplanian mental health consultation: Historical background and current status. *Consulting Psychology Journal*, 46(4), 2-12.
- 浜谷 直人 (2005). 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか——発達臨床コンサルテーションの支援モデル—— 発達心理学研究, 16, 300-310.
- 浜谷 直人 (2012). 特別支援教育における心理学の専門性と教育実践の関係——その危惧に関する考察—— 心理科学, 33, 13-22.
- 浜谷 直人 (2013). 保育実践と発達支援専門職の関係から発達心理学の研究課題を考える——子どもの生きづらさと育てにくさに焦点を当てて—— 発達心理学研究, 24 (4), 484-494.
- 平松 美由紀 (2011). 幼児理解を深めるためのカンファレンスの検討——保育実践の一場面のカンファレンスの省察から—— 中国学園紀要, 10, 163-167.
- 藤崎 春代・木原 久美子 (2005). 統合保育を支援する研修型コンサルテーション——保育者と心理の専門家の協働による互恵的研修—— 教育心理学研究, 53(1), 133-145.
- 井上 真理子 (2013). 専門性の向上と保育カンファレンス——カンファレンス構造指標モデルの提言—— お茶の水女子大学人文科学研究, 9, 71-82.
- 石原 みちる (2018). 教師が経験したスクールカウンセラーによるコンサルテーションプロセスの質的研究 心理臨床学研究, 36 (3), 311-322.
- 木全 晃子 (2008). 実践者による保育カンファレンスの再考——保育カンファレンスの位置づけと共に深まる実践者の省察—— 人間文化創成科学論叢, 11, 277-287.
- 今野 直子・斉藤 あゆみ・太田 祐貴子・青木 紀久代 (2014). 心理臨床家の保育者支援を考える——「気になる子どもの保育フォーラム」の実践から—— お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, 16, 15-23.
- 真鍋 健 (2011). 障害のある幼児に関する保育所巡回相談の評価——X市における保育者と保育コーディネーターへの質問紙調査より—— 幼年教育研究年報, 32, 43-52.
- 松本 信吾・中坪 史典・杉村 伸一郎・林 よし恵・日切慶子・正田るり子・藤橋智子 (2012). 保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもちたすのか 学部・附属学校共同研究紀要, 40, 177-182.
- 松井 剛太 (2009). 保育カンファレンスにおける保育実践の再構成——チェンジエージェントの役割と保育カンファレンスの構造—— 保育学研究, 47 (1), 12-21.
- 守 巧・中野 圭子・酒井 幸子 (2013). 保育者の主体的な保育実践を導くコンサルテーション成立要因の抽出 保育学研究, 51, 368-378.
- 森 正樹 (2010). 保育・教育現場の主体的課題解決を促進するコンサルテーションの研究——特別支援教育巡回相談の失敗事例の検討から—— 宝仙学園短期大学紀要, 35, 39-49.
- 森上 史郎 (1996). カンファレンスによって保育をひらく 発達, 68, 1-4.
- 向井 美穂 (2018). 保育所の巡回相談において「対話」が果たす役割——保育者の子ども理解を支

- える巡回相談機能の検討——十文字学園女子大学紀要, 48 (1), 33-42.
- 無藤 隆 (2017). ここが変わった! 3 法令改訂(定)の要点とこれからの保育——平成 29 年告示幼稚園教育要領 保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領——チャイルド本社.
- 中坪 史典・上松 由美子・朴 恩美・山本 隆春・財満 由美子・林 よしえ…落合 さゆり (2010). 遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究——幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討——学部・附属学校共同研究紀要, 38, 105-110.
- 成田泉・関理恵・澤田美佳・水内豊和 (2017). 障害のある子どもの保育カンファレンスに関する研究——保育カンファレンスと保育実践の循環に着目して——とやま発達福祉学年報, 8, 33-44.
- 大橋 智 (2017). 保育巡回相談におけるコンサルテーションの機能の質的分析——KJ 法を用いたモデル化とテキストマイニングによる属性分析——明星大学発達支援研究センター紀要 MISSION, 2, 11-24.
- 大村 禮子 (2010). 保育の場における発達支援——協働体制の確立に向けて——淑徳短期大学研究紀要, 49, 141-159.
- Rustin, M., Bradley, J., Bradley, J., & Rustin, M. (Eds.). (2008). *Work discussion: Learning from reflective practice in work with children and families*. London: Karnac Books.
- (鈴木誠心・鶴飼奈津子 (監訳) (2015). ワーク・ディスカッション——心理療法の届かぬ過酷な現場で生き残る方法とその実践——岩崎学術出版社)
- 汐見 稔幸 (2015). 保育に活かせる文献案内(9)園内研修と保育カンファレンス 発達, 142, 76-79.
- 高濱 裕子 (2014). 保育・幼児教育. 平木典子・稲垣佳世子・河合優年・齋藤こずゑ・高橋恵子・山祐嗣(編) 児童心理学の進歩 金子書房, 121-139.
- 田中 三保子・榊田 正子・吉岡 晶子・伊集院 理子・上坂元 絵理・高橋 陽子…田中 都慈子 (1996). 保育カンファレンスの検討——第 1 部 現場の立場から考える——保育学研究, 34(1), 29-34.
- 田中 浩司・田丸 尚美・高月 教恵・高橋 実 (2010). 幼稚園における特別支援教育に関する研究——保育カンファレンスを中心とした支援事例の検討——福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報, 7, 29-35.
- 鳥光 美緒子・中坪 史典・佐々木 裕子・縫部 義憲・米神 博子・林 よし恵…深田 昭三 (1999). 保育観の意識化とそれに果たすカンファレンスの役割——保育行為を内省するとは——研究紀要, 28, 39-48.
- 鶴 宏史 (2012). 保育所・幼稚園における巡回相談に関する研究動向 帝塚山大学現代生活学部紀要, 8, 113-126.
- 若林 紀乃・杉村 伸一郎 (2005). 保育カンファレンスにおける知の再構築 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 教育人間科学関連領域, 54, 369-378.